

平成26年度第2回 西脇市ふるさと経営推進市民会議 会議録

開催日時	平成27年3月3日（火） 19時00分～20時45分
開催場所	西脇市生涯学習まちづくりセンター 会議室2
出席者 <敬称略>	生田伸吾、大久保恵司、大嶋俊英、大前道廣、勝岡めぐみ、 亀岡澄子、藤井志帆、藤原孝三、藤原隆宏、宮崎美椰子、 吉田光一郎（※50音順） （オブザーバー）中川幾郎、片山市長 （事務局）ふるさと創造部：大前部長 企画政策課：細川課長、萩原補佐、澤田主任、中野、 岩根 まちづくり課：柳田課長、高瀬補佐

会議の概要

（次第に沿って進行。意見等は以下のとおり）

■片山市長あいさつ

- 皆様には、お忙しい中お集まりいただき感謝申し上げます。
- 平成27年度主要事業の資料では、正式に決まっていないため掲載していないが、岡之山美術館で山田洋二監督と横尾忠則さんがコラボレーションした展示会や、山田監督の講演会の開催を計画している。お二人を組み合わせたイベントはおそらく初めてであり、市制10周年という節目の年に、非常におもしろい事業を企画している。
- 忌憚のないご意見をよろしくお願ひしたい。

■議事(1) 平成27年度主要事業について

- 事務局から、資料に沿って、来年度の主要事業について説明
※ 平成27年度予算は、3月議会にて審議されており、議会で議決をいただくことを前提としている。

<オブザーバー（中川先生）意見>

- 山田監督と横尾さんの記念事業は、どの財源を充てるのか。
→ （事務局）（公益財団法人）西脇市文化・スポーツ振興財団の事業で行う。
- 「ファッションシティ」という言葉が出てきたので、「ファッションシティ戦略」を別に策定されているのか気になった。名前だけにならないよう、戦略があるのかが問われる。

<意見>

- これから観光に力を入れていくということだが、西脇市ならではの資源は「日本のへ

そ」だと思ふ。「日本のへそ」を示す経緯度標柱の文字を書いた鈴木貫太郎さんにスポットを当ててPRしたらどうか。「日本のへそ」は世界に一つしかないわけで、すごく価値があると思ふ。西脇市にしかないものをもっと外に発信していかないといけないのでは。

- 播州織については縫製できるところが全くない。生地づくりばかりしているが、シャツづくりをする方向にいつているのだから、ないないと言うのではなく、縫製の分野を育てていかないといけないし、そういう施策を考えてやってもらいたい。
- (事務局) 国のほうでまち・ひと・しごと創生法ができ、来年度は地方版総合戦略を作ることになっている。その中の柱として、雇用・子育て・移住がある。移住に関しては、まず西脇市を知ってもらうことである。知ってもらってこそ、移住につながっていく。また、西脇市にもいろんな資源があるが、総合戦略を策定していく中で、地域の資源をもう一度見直していくと同時に、新たな資源も発掘していかねばならないと考えている。
- (事務局) 播州織の縫製工場の話であるが、播州織といつても主に生地産地である。せつかく資源があるのだから、地元で製品化していく仕組みが必要だろうし、ファッション都市構想の中でも検討していくと思ふ。産業構造を改革していく中で、西脇市の活性化につなげていくことを目指しているが、現実は難しい。だからといつて、このまま放っておいていいわけではない。行政だけでは知恵、ノウハウに限りがあるので、産官学金の枠組みの中で専門的なアドバイザーの意見もいただきながら、真に実行できる戦略を作っていくたい。計画は5年ということになっており、5年間では位置づけできないこともあると思ふが、まずは第一歩として総合戦略の中で、いただいた意見を踏まえながら考えていきたいと思ふ。

〈オブザーバー (片山市長) 意見〉

- 広告代理店の方と話をしたが、その中でも「日本のへそ」をPRできないかという話は出た。鈴木貫太郎さんの話もいいお話で、また戦後70年という年でもあるので、そのあたりからPRできたらと思ふ。
- ファッション都市構想であるが、縫製工場がないとブランドの立ち上げは難しい。ぜひ西脇市から世界へ発信したいという思ひがある。そのために、若い人に西脇に来てもらい、20人の播州織デザイナーを誕生させたい。また、福祉とタイアップして、障害のある方の働ける場所となるような工場ができればとも考える。若い人が西脇に来て、自分でミシンを使って縫い、足りない部分を障害のある方が補うようなイメージで最初は小さな縫製工場ができればと思ふ。市内で起業された女性の方は、現在15名くらい雇用されており、日本で一番新しい織物工場である。そういうものが20件あれば、15人×20件の雇用になり、また、1件で2億円くらいの利益があるとすれば、トータルで40億円くらいになる。すごくハードルが高いことだが、いつまでも難しい難しいと言つていてはいけない。

■議事(2) 西脇市参画と協働のまちづくりガイドラインの見直しについて

- 事務局から、資料に沿って、参画と協働のまちづくりガイドラインについて説明

<オブザーバー（中川先生）意見>

- 参画と協働のまちづくりガイドラインは、合併後の自治体の基本精神にしていこうということのできたものと記憶しており、いよいよ定着していかなければならない時期であろうかと思う。この改訂版を注意深く見ていくと、コミュニティの位置づけができている。
- 地域自治協議会とまちづくり協議会の何が違うのかという意見が出ていると思う。これについては、このガイドラインをきちんと読めば分かってくる。まちづくり協議会は、地域で活動している主要な団体の連合体で、地域自治協議会は個人個人が構成している個人的で民主的な集合体である。関わりを持ちたくない人は、執行部に入らなければいいのだが、そういった人も構成員である。いわば小さな西脇市みたいなものができるわけであり、小さな村役場が復活するといったら分かりやすいかもしれない。そのイメージを思い切って出してもいい時期にきている。
- データを見ると西脇市の人口減少は進み、職員数は縮小されており、これは行財政改革を非常に真摯に頑張ってきた結果であるが、非常に厳しい状況になってきていると思う。団体自治がパワーダウンするのは当たり前のことであるが、それを支えるのは住民自治の力である。仕事は市役所が全てすればいい、税金が安ければいいというように、何でも市役所という文化はかなぐり捨てないといけない。その段階に西脇市はあると思う。
- 地域社会は従来のように60代、70代が支えきれない状態ではなく、西脇市でも限界にきている。神戸市のような都市部でもあと5年したら崩壊する。今のような縦割りの団体は通用しない。神戸市で2番目ににぎわっている兵庫区の自治会、町内会の加入率は年に2～3%刻みで減っている。役員の年齢分布をみても主力となっているのは70歳代であり、70歳代の役員で持ちこたえている。60代は3年前に比べて約7～8%減り、50歳代は10%くらい減っている。どこも後継者が出てこないというが、今のような地域のシステムではなかなか出てこない。これからは、30歳代の働き盛りでマンションに一人暮らししているような人をターゲットに入れ、子育ての女性達をどれだけ地域が応援できるのかという視点を持たなければならない。
- また、生活保護や母子家庭などを支え合えるという福祉の視点も地域自治で持つ必要がある。悠々自適で暇も体力もあるような人が地域を支える時代は終わった。特に、中央区と兵庫区は高層マンションが続々と立ち並んでいるが、そこに住む人達は自治会に入らない。これは、会費を払って自治会を構成しないといけないためで、加入するメリットがないからだ。地域自治協議会には、楽しいことをいっぱいやってほしい。例えば、子供が小学校に入学、卒業したときに地域みんなで祝うといった機会を作り、時間を共有する。そうすることで、災害が発生したときにも、みんなで支え合える心のつながった関係を構築できる。こうした行事設計をすればいいのでは。
- 年に一回は避難訓練をやってほしい。たとえ地区の5%でもいいので、1泊2日で避難訓練として体育館に泊まってほしい。実際にそこで地域運営ができるか訓練してもら

ったらどうか。ただ、そこでいつも表面化するのは、悲しいことに人権学習が足りないということだ。

- 地方創生で国がアイデアを出しなさいと言っているのは事実であるが、過剰な目標値を掲げないように。あとで首がしまることになる。今回は交付金をもらうための一歩だと思ってもらえばいい。2年目、3年目で修正しても構わないが、総合計画との連動性は忘れないように。この中でブランドというものがテーマになってくる。ファッション都市を目指すというのを本気でやってほしい。言葉だけのファッション都市では住民は動かなくなる。この言葉を本気で使うのなら戦略を立ててほしい。そのためには、前衛、中衛、後衛という形で仕事を組み立てていかなければいけない。いわゆるアパレルという言葉があるが、繊維を武器とする限りは、アパレルで勝負する。下流産業になってはいけない。原料供給産業ではなく、デザインや縫製も込みで展開していく。そして西脇市で織物のファッションショーができるくらいの力をつけてほしい。若い女性も来るだろうし、それに合わせて人の流れもできるので、そういうストーリーを考える。市民と一緒にワークショップをするなど、参画協働で苦しんでいく中から成功体験は出てくる。本当に底力があるのは土地の人。西脇の人達が本気になったら勝つ。しかしながら、効果がみえないとやる気がしないので、そういうときには外野が少し役に立つ。ただ、私を使えばうまくいきますという外部の人材を使ってもたいがい失敗する。本当に戦い抜いて勝っているのは、その土地に定住している人であり、逃げない人である。
- ブランドの最終価値は人に尊敬されること、憧れられることである。希少価値があることが重要であり、大量生産は考えない。みんなが持っている物はブランド力が落ちる。播州織を持てる利点、アドバンテージを売るのなら、現在の生産量を守りながらも品質を高め、付加価値を高めていくこと。そのために、西脇は普段から素敵な播州織を着た人が大勢歩いているおもしろい街だというような演出もいいかもしれない。みんなで播州織を着ようという運動を市民が起こせばいい。これこそ、市民参画で起こせるブランド戦略だと思う。

<意見>

- 人権教育が足りないという話があったが、本当にその通りだと思う。先ほど説明のあった主要事業の中に子供たちの学力向上事業やICT教育推進事業があったが、人権意識を向上させていく事業も大切ではないか。
- 鈴木貫太郎さんの話に驚いた。また、10周年事業や地方創生事業など、内容が盛りだくさんであった。こうした内容は市民の皆さんが知らないといけないと思うので、私も含めて積極的にPRをしていけたら。こうした地道な取組が、地元が本気になるための礎になると思う。
- 西脇のブランド力を高めていけたらと思う。ファッション都市構想とあったが、先日の広報の表紙に播州織の服を着た若い女の子が載っており、すごくきれいだった。住民が力をつけないと、という話であったが、多可町ではオープンガーデンが人を集めてい

る。西脇も観光に力を入れるということだが、西脇も庭をきれいにされている方がたくさんいる。そういう方が頑張れば、観光も盛り上がるのでは。

- 参画と協働のまちづくりガイドラインは素晴らしいと思う。これを実現するために、PDCAのPの部分に住民がしっかり入っていく、様々な事業に住民が関わっていくことができるような指針になれば。また、障害のある人の雇用を考えるという部分については、障害のある人自身が携われるようになればと思う。
- 障害のある人の雇用というものは普段から考えていることであり、そういう話が出てきたので、よりイメージしやすくなった。避難訓練の話もあったが、障害のある人に対する意識が変わるような取組みを考えていけたらと思う。
- 学力向上に力を入れていくということだが、だんだんと若手の先生が増えていく中、小学生の間はきめこまやかな、心遣いのできる先生がいてくださればと思う。
- 防災訓練のように1泊2日で体育館に泊まるというのを是非してほしい。人権学習が足りないという現実を知りたい。ファッション関係では、自分の家に播州織があるかなとも思ったが、参加賞でもらったコースターくらいしかないので、反省している。自分の子どもも播州織を着る機会がない。学校で作るエプロンを播州織にするとか、子どもたちがファッションショーをするなどしたら楽しいかなと思う。また、夏だったら播州織でクールビズをするのもいいのでは。先日、道の駅でへそゴマを買ってお土産にしたらすごく喜ばれた。またこの前、有名なパティシエが、西脇産の金ゴマを使ったチョコで国際コンテストの賞をとられていたが、あまり話題になっていなかったように思う。
- 創エネ、省エネという事業があるが、これは金のある人に金を渡す制度である。そうではなく、こうした大きな設備が買えない人に対するものとして、市が実施する「エコポイント制度」をもっと拡充し、市民に浸透するように広報してもらいたい。また、西脇市は自主防災訓練が機能しているだろうか。こうした一つ一つの活動を大事にするべき。エコネットにしわきにおいても下がうまく動かない。いかに下からのボトムアップで動くような仕組みをつくるかが悩ましい。また、外からの意見も大事ではないか。外からの意見を受け、そこから先は住民が自分達で動くとうまく回るのではないかと思う。
- ガイドラインを読んだが、非常にいいことが書いてある。結局は市民がその気にならないといけない。行政は具体的に進めていく段階にきている。本当はもっと早い段階でやらないといけなかったが、順当な順序ではきていると思う。ここから先が本当の正念場ではないか。福祉が充実するために何が必要かということ、市民が福祉に積極的に関わっていくという気持ちを持つことであり、行政がこのきっかけをどう作るかという点だと思う。

- 今日の資料にあるのは主要事業だからかもしれないが、少子高齢化社会の中で、子育て支援や高齢者に対するものが少ないのかなど。タクシー券を増やすなどがあるが、交通手段の確保がすべてではなく、地域全体で支援していくことが大事ではないか。また、観光についてだが、受入れ態勢はできているのか。へそ公園や西脇市駅などから西脇市をどうやって散策するのか。レンタサイクルなども必要なのではないか。

■その他

<事務局>

- 委員の皆様には、2年間で大変お世話になった。
- 市民会議は市民の方の意見を聞く貴重な場であり、こうした意見を政策の中に生かしていくのは行政の仕事である。
- 来年度以降も市民会議を設置したいと考えているので、ご協力をお願いしたい。

